

曲目解説

研究熱心な各校顧問の選曲により、毎回充実したプログラムで注目されているジョイントコンサート。今回も新作・話題作が満載の熱いプログラムでお送りします。解説も頑張って書きます。お楽しみに！

各校演奏

●ロード・タラモア(タラモア卿)

Lord Tullamore

カール・ヴィトロック

Carl Wittrock (b.1966:オランダ)

ヴィトロックは日本では無名に近い作曲家だが、オランダの音楽大学の教員で、複数の楽団の指揮者も務めている。ポピュラー音楽や映画音楽を主に手掛けているが、吹奏楽曲も多数出版しており、映画のようなドラマティックな作風が特徴的である。日本の吹奏楽界でも一部では以前から話題になっていたが、もっと注目されるべき作曲家であると言えよう。

今回演奏する「ロード・タラモア」(タラモア卿)は、アイルランド民謡の要素が、西洋風の音楽に盛り込まれた3部構成の曲である。力強い打楽器と金管楽器のファンファーレがオープニングを飾る。タイトルの「タラモア」とは、アイルランドの小さな村の名前。美しい自然やダンス音楽が、美しく穏やかなメロディや、技巧的なメロディとして現れる。2001年作曲。

●神々の運命

Fate of the Gods

スティーブン・ライニキー

Steven Reincke (b.1970:アメリカ)

アメリカの作曲家ライニキーが、北欧神話の世界終末の日「ラグナロク」(神々の黄昏)に着想を得て作曲した曲である。北欧神話の世界観では、世界の中心には1本の巨大な「世界樹」があり、その周りで神々と巨人は対立するものとして描かれている。冒頭部は天地創造の様子。太鼓や低音楽器の響きは雷鳴を連想させる。前半部は神々と巨人の対立の描写で、次第に激しさを増して、あらゆる命が巻き込まれ消えていく。中間部は、穏やかな美しい音楽となる。これは光の神ヘイムダルを描いたものである。しかし、ヘイムダルの持つ角笛が鳴り渡り[金管楽器で表現]、世界終末の日「ラグナロク」の到来を告げると戦いは激化し、世界は混沌として破滅を迎える。ただ、世界の中心にあった「世界樹」はだけは生き残り、そこから新たな世界が再生していく。最後は希望に満ちた、感動的な音楽で盛り上がる。2001年作曲。

●ペルセウス - 大空を翔る英雄の戦い -

Perseus - A Hero's Quest in the Heavens

八木澤教司

Satoshi Yagisawa (b.1975:日本)

八木澤教司さんは市川市在住の若手作曲家で、ジョイント参加各校の顧問とも親交があり、いつも専門的なアドバイスを頂いている。管弦楽曲、吹奏楽曲、アンサンブル曲など幅広いジャンルで次々と新作を発表しており、創作意欲は衰えを知らない。近年では海外でも人気が高まり、世界中を飛び回り活躍している。この作品は、京都府立桃山高等学校吹奏楽部の委嘱により作曲された。「宇宙や星に関する夢のある題材を使用して欲しい」という要望に応じて、ギリシャ神話の英雄ペルセウスが題材に選ばれた。天馬ペガサスに乗った英雄ペルセウスが、お化鯨の生贄にされた王女アンドロメダを救い出すという物語である。2005年作曲。

●ポンテ・ロマーノ

Ponte Romano

ヴァンデルローストは母国のレマンズ音楽院で教授職を務めており、多くの若手作曲家に影響を与えている。日本の大学でも客員教授を務めるなど、日本にも馴染深い作曲家である。

この曲は、イタリア北西部の小さな村の市民バンド100周年記念作として委嘱されたもので、村の中心部に架かるローマ時代の古い石橋を見て、これを渡りアルプス超えに挑むローマ軍の進軍を連想して作曲された。タイトルはイタリア語で「ローマの橋」の意味。2000年作曲。

ヤン・ヴァンデルロースト

Jan Van der Roost (b.1956:ベルギー)

●ラッキードラゴン - 第五福竜丸の記憶 -

Lucky Dragon

福島弘和さんは吹奏楽を中心に作曲活動を行っている。大編成向けの曲から、小編成向けの曲まで幅広く手掛けており、学校バンドの指導者の立場から見ても大変頼もしい。いずれの作品も高く評価されており、各種演奏会やコンクールで演奏される機会も多い。

この曲は1954年、アメリカによるビキニ環礁での水爆実験の際に、運悪く居合わせて被爆した日本のマグロ漁船「第五福竜丸」を題材とした、アメリカの画家ベン・シャーンの絵本に着想を得て作曲された。この本には「この出来事を人々は忘れない。しかし忘れるのをじっと待っている人達もいる」という一節があり、音楽で福竜丸の事実を忘れさせないことへのきっかけになれたらという思いから作曲された。「ラッキードラゴン」とは、絵本の中の1枚の絵に付けられた題名から採られたもので、途中までは事実に沿った内容が音楽で描かれ、後半の明るくなる部分は、船の魂である福竜が船体から離れ、真の意味で「ラッキードラゴン」となって天に昇っていくイメージが描かれている。作曲者はこの曲を通して、演奏者にも観客にも「忘れてはならない」輪が少しずつでも広がっていくことを望んでいる。2009年作曲。

福島弘和

Hirokazu Fukushima (b.1971:日本)

●鳥之石楠船神 - 吹奏楽と打楽器群のための神話 - 片岡寛晶

Tori no Iwa Kusu Fune no Kami

Hiroaki Kataoka (b.1983:日本)

片岡寛晶さんは新進気鋭の若手作曲家。大学は打楽器科を卒業。現在は管弦楽、吹奏楽、音楽教育などの活動の傍ら作曲・編曲も行っており、これらの作品は各地で演奏されている。

タイトルの「鳥之石楠船神」(トリノクスネカミ)は、日本神話に登場する神様の船。和の響き、リズムの面白さなどを活かした5つの紡いで構成したところ、頭の中で躍動的な獅子神楽が鳴り響いたという。新たな日本神話を吹奏楽で表現したものである。吹奏楽版は2013年初演。

■ドリーム・クルーズ

八木澤教司

ジョイントコンサート第20回記念作品。第20回の参加校7校(国分、市川西、松戸矢切、松戸秋山、松戸六実、船橋西、白井)の共同委嘱作です。学校統合等で失われた学校名もありますが、この曲の中に当時の思い出として、今も息づいています。オランダのデ・ハスケ社より出版されました。

■今日の日はさようなら

金子詔一 (編曲: 樽屋雅徳)

もともとは合唱の曲ですが、人気の若手作曲家、樽屋雅徳さんの手により、演奏会などのエンディング、あるいはアンコールで使えるようにアレンジされたものです。リズムは16分音符がスウィングするアフリカの面白いアレンジです。歌詞は裏表紙にあります。ぜひ一緒に！。